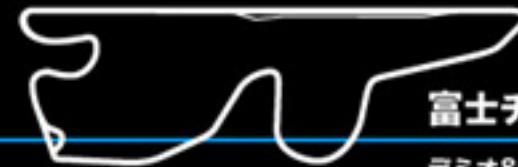




WE SUPPORT MAZDA MOTORSPORTS

気張らず! 楽しく!

ENJOY SUNDAY RACING!



富士チャンピオンレース

デミオ&ロードスター
ナンバー付レース参戦ガイド



- レースに参加しよう!
- 2010年シーズン開幕戦レポート

[TOP](#)



NCEC 型ロードスター！ ついに富士スピードウェイに登場 **FUJI CHAMPION RACE**

富士チャンピオンレース開幕戦フォトレポート

首都圏サンデーレーサーのメッカともいふべき
「富士チャンピオンレース」に、本年より待ちに待った
現行型(NCEC)のロードスター・登録ナンバー付き車両の
参戦が始まった。

3月14日に開催された開幕戦の全エントリー台数は、カートを含め合計143台、内マツダ車はNA6C&NB8Cロードスター・ナンバー付きをはじめ、N1レース仕様のNAロードスターやデミオなど約60台が参戦した。



FJやカートクラスを除いたツーリングカーのエントリー台数は88台なので、マツダの占有率はなんと68%にのぼる。一見して「マツダワンメイクレースデー」といった様相だ。そのNCECロードスターの開幕戦のエントリーは3台。しかし、初年度は筑波パーティレース仕様車もそのまま参戦可能なレギレーションとなっており、今後の筑波組の参戦が台数増加のカギとなりそうだ。



では、そのNCECナンバー付きロードスターのエントラントを紹介しよう。#86は筑波仕様車で参戦の野上達也。

記念すべきNCクラス最初の優勝者となった。

「ぶっつけ本番なのでどうなることか心配でしたが、NC同士のいい競い合いができたと思います。

次戦以降の参加はだ白紙ですが、状況が許せば参戦したいと思っています」。

父親の影響でレースを始めた22歳の伸び代は、まだまだ未知数だ。



#18も同じくパーティレース仕様で参戦のランマン。
エントリーネームは「美酒爛漫」から取っているとのこと。
「筑波のパーティレースには4年出ていますが、その仕様で
出られるということを知ったので参戦しました。
新旧のロードスターとのバトルもできてとても楽しかったですね。
ランオフエリアも広くて安心して走れました。
今後もできれば出たいですね」。
ちなみに筑波も参戦は継続していくとのこと。
ガッツ有ります。



#55はNCでの富士開催を心待ちにしていたという高田英明。唯一、完全富士仕様のマシンで参戦となった。愛車は普段の通勤(東京都内)にも使うので快適性が損なわれるのは辛いというが、このサスペンション仕様であれば「まったく問題ない」そうだ。マシンのシェイクダウンもかねたレースは5年ぶりの参戦とのこと。やや緊張した様子だったが、「とにかく楽しかった、やっぱりレースはやめられない」と笑顔がこぼれていた。



開幕戦ではNCECクラスはNB8、NA8クラスとの混走レース。絶対的スピードは改造範囲が広く、かつ車重も軽く、セッティングの決まっているNA8、NB8が速い。

後方スタートとなったNCは、予選26台中21番手が野上達也、23番手に高田英明、24番手にランマンの順となった。

決勝のフルグリッドは45台なのでまだまだ、たくさんのエントリーが可能である。

コース幅の広い富士で、さながらSUPER GTのようなロードスターによるフルグリッドレースを見てみたいものだ。



NCECとデミオのエントラントが共同で借りていたピット内にはこのレースを盛り上げていくための試策として、簡単なホスピタリティスペースと、温かな飲み物やスナックなどが用意され、仲間と一緒にくつろげるような配慮がされていた。予選終了後、同スペースにて、ホスピタリティサポートやレース運営など、広く意見を求めるミーティングが行われた。家族や友人達が集える場として、またエントラント同士の交流も増えることだろう。



まだ肌寒いものの、快晴となったこの日の決勝レースは8周。絶妙なスタートを切った高田英明がNCECクラストップで1コーナーに飛びこむ。

しかし、若年ながらレース経験に勝る野上達也が2周目にトップを奪取し安定したペースでラップを重ねる。

2番手は最後まで高田とランマンが僅差で争い、最終ラップにランマンがわずかなチャンスをものにして2位に浮上するとそのままチェッカーを受けた。8周といえども1周4.56kmのコースなので、バトルは37kmにもなる。



NCECクラスの暫定表彰。かつて参戦していたヴィッツレースでは表彰台は限りなく遠い存在だったという高田英明にとって、レース人生初となるお立ち台。

他の二人を含む三人とも満面の笑顔で、気分はすっかりグランプリドライバーだ。

この快感を味わうと、もうやめられない。人は何故競うのか。やはり、誰しもポディウム上から周囲を見下ろしてみたいものなのだろう。



閑話休題。

サラリーマンレーサー、高田英明はロードスター1台にこれだけの荷物を搭載してきた。マシンメンテナンスも出来るところはすべて自分で行い、(なんとLSDも自身で装着したそうでその知識と技術は素人レベルを超えているようです) 家族(奥様と二人のお子様)には負担を掛けず長く続けていきたいと語っていた。

工夫をすれば、たったひとりでもレースができる。これがナンバー付き車両レースのもっとも魅力的なポイントだ。



見事に取まった完成図。

もちろんトランク内も隙間なく有効に活用、いや見事な搭載技術。
創意工夫と努力のたまものです。

タイヤさえスピードウェイ近辺に預けられれば、念願の11歳の
息子さんを連れてサーキットまで来られるとか・・・。

このナンバー付きロードスターレースの場合、そういった
ユーザー目線に立ったサービスが用意できれば
参加者もより利用し易くなるだろう。

富士に来れ、全国のロードスタードライバー達よ!!